希望の灯は消えない。
～2013年台風ハイエンからの復興を振り返って～

修復された学校校舎で卒業を祝う小学6年生の子どもたち

いつもアイキャンを応援くださり本当にありがとうございます。

年2回発行しております会報に加えて、この度は「2013年台風ハイエンからの復興を振り返って」を製作させていただきました。

アイキャンは1994年の設立以来、フィリピンを中心に子どもたちの能力向上や地域の環境改善に取り組んできました。その中でも2013年の台風30号（ハイエン）による災害は瞬間最大風速90m/sを記録するフィリピン史上最大級の台風であったことから、レイテ島を中心に壊滅的な被害があり、現地の方々とともに長い年月をかけて復興活動に取り組んでまいりました。

多くの皆さまからのご支援を頂き、約3億9百万円規模の復興事業に努めた結果、アイキャンとしてできることへの支援を完了することができました。その区切りとして、ご厚情を頂きました皆さまへのご報告として本冊子を製作しました。まだまだ子どもたちの奥底に残された心の傷を癒やすまでは時間が必要かと思われますが、再建された小学校や現在の子どもたちの笑顔をご覧いただければ幸いです。

なお、これをもちましてハイエン台風で皆さまから頂きましたご寄付の使用残金「21,137,996円」につきましては、アイキャンが運営する児童養護施設「子どもの家」の運営資金に用途変更させていただきたく存じます。フィリピン災害に対するご寄付は、これまでハイエン台風以外でも多数頂いており、その残金「1,751,296円」は引き続き災害時に使わせていただきます。

「子どもの家」の運営資金は、上記をもちましてもまだ不足しており、安定的な運営のためには2022年2月に開始した「ファミリープログラム（https://ican.or.jp/family_program/）」へのご参加も、ご検討いただけますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

本冊子及びご寄付の用途変更に関するお問い合わせは、アイキャン・ホームページのお問い合わせフォーム（https://ican.or.jp/contactform/）からお願い申し上げます。

代表理事　鈴木　真帆

2013年11月8日

“想像を超える台風が、私から全てを奪っていた”

誰1人取り残さない。必死になって、奮闘した日々。

2013年

9,879世帯

災害発生の翌日より物資の調達を開始し、発災の5日後より、レイテ島東海岸被災地において、食糧一式（米、水、缶詰、塩、砂糖、油など）の物資提供を開始しました。政府や別団体の物資が届かず、命の危険に瀕していた被災者の空腹を満たし、9,879世帯(59,274名)の命を守りました。被災地の各地に掲げられていた「HELP!」と書かれた看板は、「Thank you!」という看板に変わっていき、住民からは感謝の言葉や笑顔が増えていきました。

2014年

3,438世帯

災害発生の約1ヶ月後、レイテ島ドゥラグ町のサンホセ村において、家屋が全壊してしまい住む場所を失った1,677世帯に対して、建設資材一式を提供しました。また、ドゥラグ町の15村において、仕事を失い現金収入が途絶えた現地住民を対象に、大工技術の研修を実施し、キャッシュフォーワーク(研修を受けた現地住民の雇用)を通して、1,761軒の「台風に強い家」を建設しました。合計で3,438世帯(20,628名)が安心して生活できるようになりました。

2014年

125教室

ドゥラグ町の16村において、全壊または一部損壊した125教室の建設・修復を行いました。学校校舎の修復作業は、キャッシュフォーワークを通して行い、被災により仕事を失った1,360名の現地住民に現金収入を得る機会を提供しました。アイキャンのエンジニアが建設資材の仕様と質、建設工程の監督を行って、災害前よりも頑丈な学校校舎へと生まれ変わりました。その結果、4,008名の子どもが、適切な環境で教育を受けられるようになりました。

“私たちは一人じゃない。そこには、アイキャンがいた”

皆さま・住民と「ともに」成し遂げられた復興

2015年

家屋及び校舎の建設・修復後、住民の方々への聞き取り調査を実施し、事業の成果の確認を行いました。建設や修復のキャッシュフォーワークに参加した男性と同様に、「チェッカー」という役職で、建設労働者の出席確認や資材や用具の管理を行っていた女性も、現金収入を得ることができ、キャッシュフォーワークが被災者の生活の再建に貢献したことを確認しました。収入は、子どもの教育費にも充てられ、子どもたちは学校に通い続けることができました。

2017年

2017年にアイキャン現地スタッフがレイテ島を訪問し、学校校舎の使用状況の確認を行いました。学校は、教師及び子どもたちが大切に使用しており、適切に維持管理がされていました。訪問時には、校舎を綺麗に掃除する子どもたちの姿が観察されました。「この校舎は、私のお父さんが作ったんだよ！」と誇らし気に語ってくれる子どももおり、適切な環境で日々授業を受けて、自分の将来を切り拓くことのできる学びの場を守ることができていました。

2022年

建設・修復後から約8年経った現在でも、校舎は良好な状態で使用されていました。学校の教師より、新しく建設・修復された校舎で学んでいた子どもの中には、現在大学に通う者、仕事を得て生活している者がおり、夢のために頑張っていると聞きました。また、家屋も改修や増築を経て、現在も変わらず残っていました。「アイキャンが戻ってくると思って、このアイキャンのスティッカーをずっと大切にしていたよ」と、笑顔で住民の方は語ってくれました。

台風ハイエン事業の成果

2022年5月24日～26日に実施した、最終モニタリング評価の結果をご報告致します。

成果1：災害への耐性強化

アイキャンが建設・修復した家屋、学校校舎は、災害に強いという点が証明されました。2017年7月にマグニチュード6.5の地震、2021年12月には猛烈な台風がレイテ島を襲いました。その影響で、事業地においても損壊した建物が観察されましたが、本事業で建設・修復した家屋、学校校舎には被害は確認されませんでした。

成果2：大工技術の活用

台風ハイエンの影響で仕事を失った現地の被災者を対象に、「台風に強い家の10の原則」の研修を実施しましたが、その技術が依然として活用されていることが確認されました。被災から約9年の間で、改修や増築を行った家屋も多く見られ、増築の際には、研修で学んだ筋交いの取り付けを実践していることを確認しました。

成果3：継続的な就労機会

本事業終了後、建設・修復した家屋や学校校舎の改修・増築需要に対して、キャッシュフォーワークに参加した現地住民が、地元の学校や近隣住民より仕事を受注していました。本事業を通して、地元において雇用が創出され続けるという長期的な成果も確認することができました。なかには、マニラ首都圏で建設業に就職した者もいました。

成果4：災害に強い地域

村の役員と学校教師への聞き取りの結果、2021年12月に発生した猛烈な台風の上陸前には、台風ハイエンの時とは違い、村役員と学校教師が連携し、住民を教室に避難させ、災害に対する万全な準備をしていたことを確認しました。本事業で建設・修復した学校校舎は、頑丈で安全と認識されており、避難所としても活用されています。

福田浩之

フィリピン事務所
駐在員
2013年にアイキャンに入職。2013年～2015年まで、レイテ島に駐在し、緊急支援、復興事業を担当。現在、フィリピン事業全般を統括。

当時を振り返ると、正直のところ、大変だった日々が思い出されます。私たちアイキャン職員は、ほとんど寝ることもできず、朝から夜まで救援活動をしていました。住民の方々と一緒に夜まで物資の梱包作業をし、50キロの米を運搬したり、手に傷を付けながら住宅資材の提供をしていました。身体的にはボロボロでしたが、私の気持ちは折れていませんでした。現地にいる私たちにも、皆さまの温かい応援が届いていたからです。大変な状況にも関わらず、ともに活動してくれた住民の方々がいてくれたからです。大災害から約9年が経とうとしていますが、皆さまがたのお力添えがなければ、復興を成し遂げることはできませんでした。私たちと「ともに」活動して下さり、本当にありがとうございました。

レイテ島は、太平洋戦争の激戦地となった島で、各地に日本軍の慰霊碑があります。マッカーサーが”I shall return”と述べた地としても有名です。今回の最終評価を以て、一区切りがつきました。また、いつか会える日まで、元気に笑顔で。

マッカーサー上陸記念碑(写真左)
ドゥラグ町戦没者慰霊碑(写真右)